



土岐市教育研究所
TEL 0572-54-1111 (内371)
FAX 0572-55-6310
メールアドレス kyoiku@city.toki.lg.jp
所 No.547
発行責任者 所長 長谷川 広和
発行日 令和元年9月10日
題 山田 恭正 教育長



『つながる心、広がる笑顔』
幼稚園交流(4年生)
撮影者 泉西小学校
清水 泰浩 教頭先生



豊かで健やかな児童生徒の育成

土岐市教育研究所長 長谷川 広和

今年も、中体連全国大会・東海大会激励会を行いました。参加した13名の生徒からは、土岐市を代表して出場する決意と支えていただいた方々への感謝の気持ちが語られました。それを聞きながら、私は市内大会を思い出していました。各会場で競い合った幾人もの中学生の汗と努力、思い。それら全てを受け止めてきた彼らのすごさと重みを感じました。

市内大会サッカー会場でのことです。サイドライン際に転がったボールをあきらめることなく、一人のディフェンダーが最後までボールを追いかけていました。その姿に応援席から「ありがとう」の聲がかかりました。「ナイス」や「OK」でも「よくやった」でもない「ありがとう」。この言葉が私を温かく優しい気持ちにさせてくれました。

「ありがとう」という言葉には、かける人の心の有り様が表れます。できて当たり前とか、できなければいけないと思っていれば、「ありがとう」とは言えないものです。自分中心に物事を判断するのでなく、自分が“生かされている”という思いによって、「ありがとう」の言葉は発せられます。

市役所に勤めさせていただいていると、当たり前の日常がいかにも多くの人の知恵や汗や努力の上に成り立っているかを実感します。蛇口をひねれば水が出ること。洋式化され衛生的なトイレが使

えること。温かく美味しい、栄養に配慮された給食が教室で食べられること。チョークや画用紙、ペンを使って勉強できることなど、当たり前な学校生活のひとつひとつに、それを支えてくださっている方々の顔が浮かんできます。実際には見ることに難しい、当たり前を成立させている人の営み、支えてくださっている方の心や思いを慮ることで、感謝の気持ちは生まれ、人生をより豊かなものにすると思います。

教室にて配付物を手渡ししながら「どうぞ」「ありがとう」の聲がかかる時、鳴り続けている黒板のタイマーに気付いて止める児童やテレビで映像を見るときにカーテンを閉めに走る児童に「ありがとう」の聲がかかる時、体育大会を締めくくる応援リーダーの言葉に、団席から「ありがとう」の聲がかかる時など、学校生活には多くの「ありがとう」と感謝を伝える場面があります。

「夢を持ち 人との絆の中で育ち合う」

人との関わりが希薄になりがちな今日だからこそ、私たち教師が意識して、当たり前の生活を支える人の行為や思いに光を当て、「ありがとう」の言葉で、人との絆を深く、強いものにしていくことが大切だと思います。まず、私たちから「ありがとう」と声をかけてみませんか。

土岐市主幹教諭としての役割

西陵中学校主幹教諭（生徒指導担当） 河合 哲仁

主幹教諭は比較的新しい役職であり、数も少なく、私はこれまで主幹教諭という役職の方と一緒に勤務をしたことがありませんでした。そのため、自分が主幹教諭となった時は立ち位置が把握できず、非常に戸惑いました。

現在2年目となり、少しずつその役割を理解しながら本務校として西陵中学校、兼務校として妻木小学校、下石小学校に勤務し、様々な取組をしています。そこで、あまり知られていないその取組や役割について、紹介させていただきます。

1 主幹教諭について

(1) 主幹教諭の導入

主幹教諭は、教育環境の急激な変化に対応すべく、学校組織構造を見直し、企業や行政を参考に「ピラミッド型組織」となるよう、副校長や指導教諭とともに導入されました。2008年に国の方針として制度化されて、岐阜県では2009年に始まりました。全国では約2万人（主任は全国で約27万人）、東濃5市では現在11名がその職に就いています。

(2) 主幹教諭の職務内容

学校教育法「校長及び教頭を助け、命を受けて公務の一部を整理し…」を受け、学校長の指示・助言をもとに以下のような役割を担当しています。

- ・生徒指導、教育相談、学習指導に関わる対応、支援
- ・教育委員会、子ども相談センター、子育て支援課等との連携（報告、連絡、相談の主）
- ・支援員、相談員との連携（要支援生徒対応）
- ・小中連携（中1ギャップ解消等）
- ・土岐市生徒指導主事研修会、土岐市いじめ問題対策連絡協議会等での提案 など

例えば、現在西陵中学校は非常に落ち着いた雰囲気の中で教育活動が進められていますが、不登校や家庭環境に起因するなどと思われる様々な問題を抱えている生徒など、多様な課題があります。

それらを担任や学年に任せるのではなく、主幹教諭が積極的に入って様々な機関などにつないだ

り、保護者対応をしたりすることで、指導方針を明確にしたり、多忙感の解消にもつなげたりしています。

兼務校の小学校では、授業や学年集会、行事の準備などで児童に積極的に関わっています。教頭、教務主任、担任の先生方と直接的な情報交流を行うことで、児童が中学校入学に備えることができます。このことがスムーズな中学1年生のスタートにつながっていると考えています。

また、教育総務課と連携して、市の主事会でいじめや不登校対策等に関する提案や助言を行っています。

2 今後に向けて

今後は新たな課題にも目を向けていき、市内の学校で生かしていきたいと考えます。大きくは次の2点です。

(1) 情報モラル教育

今や「情報化社会」は日常生活の中に溶け込んでおり、この生活から逃れることはできません。つまりSNS等の問題は、日常のコミュニケーションスキルや相手を思いやる心の問題です。日頃の言動を見直しながら情報モラル教育へつなげることができる教材開発、研究を行っていきたいと考えています。



小学5年生と保護者に向けた情報モラル教室

(2) 外国籍児童生徒への教育支援

前任校の国際教室の先生に教えていただきましたが、生活言語と学習言語のギャップが大きく、また文化の違いも彼らの学習の障害となっています。今後ますます外国籍児童生徒の増加が見込まれ、支援体制の充実が必要と考えます。今後のアジア圏や日本にとっても重要な取組の一つと考え、彼らがドロップアウトすることがないように、適切な教育課程についての研修も充実させていきたいと考えています。

1 はじめに

本校は、以前から妻木地区の恵まれた自然、歴史、産業などを地域の方から学んだり、地域の方と交流したりする教育課程を活用した特色ある学校づくりを進めてきた。学校運営協議会を立ち上げるのを機に今まで地域・保護者とともに取り組んできたことについて再構築し、より学校と地域の連携・協働を強化し、よりよい地域人を育成することを目指している。

2 準備期間(H29年度)の取組(方針・組織作り)

(1)運営協議委員の選任*立ち上げ当初

委員長(コーディネータ)1名、顧問1名、委員9名

○学校評議員会を運営協議会準備委員会としたため、地域の中核で活動されている方を人選することができた。

(2)三つの部会組織づくり

生活・学習支援部会 安全・環境整備部会
地域交流・ボランティア部会

○今までの地域の方の支援、PTAが行ってきたことを3つの部会に整理した。さらに、そこに、既存の地域の組織との連携を依頼した。そのためにも、公民館運営協議会の協力を得る。

3 初年度(H30年度)の活動実践

(1)コミュニティ・スクール宣言・広報

・PTA総会・区長会・民生児童委員会・公民館運営協議会・青少年ボランティア協議会

(2)運営協議会と各部会の活動

<学校運営協議会>年3回(6月、10月、2月)

内容:授業参観、各部の活動報告、意見交流

2月には、学校評価、翌年度の学校経営方針の提示、意見交流

<生活・学習支援部会>年1回

- ・各学年地域人材を活用した学習について、講師の先生との顔合せと打合せ
- ・各学年地域の指導者により、総合的な学習、生活科等の学習

<安全・環境整備部会>

年2回(7月、2月)PTA校外生活部会と合同・連携組織の人とPTA校外生活部との交流会

○保護者(校外生活部員)と地域見守りの方が同時に会を開くことで、保護者と地域が交流できた。

<地域交流・ボランティア部会>

年1回 青少年ボランティア協議会と兼ねる

○花壇の花植、どんどでボランティアを経験でき、地域のために自分は何ができるか、児童が考えるきっかけとなった。

○4年生いきいきサロンでの合唱、1年生の昔遊び、6年生の老人クラブとの交流ができた。

<コミュニティ・スクール研修>

① 先進校 岐阜小学校視察

② 拡大学校運営協議会(講話・ワークショップ)

○学校のねがい、地域のねがいを交流し、お互い自分たちにできることを考えることができた。

4 本年度(R元年度)に改善した点

(1)4月に学校運営協議会を入れ、年4回とした。

○2月に次年度の学校経営方針を提示し、4月に承認を得ることができた。

(2)各部会にコーディネータを位置付けた。

委員長1名、顧問1名(コーディネータ)、委員12名(うち2名コーディネータ)

○コーディネータ中心に各部会の委員同士相談し、運営協議会で提案事項が出されるようになった。

5 取り組みを通して

学校運営協議会の各会議や、地域の諸団体の会議で、学校の願い、取り組みを発信し、地域に支援を望むことを伝え、共有できた。

2年目は、願いに近づくために熟議を行い、地域は、より積極的に地域ができることを考え、よりよい地域人の育成と子どもの安全づくりに向かっている。



本校では昨年度から地域とともにある学校づくりを目指し、コミュニティ・スクール制度を導入している。

地域とともにある学校づくりをするために、本校では「地域と学校が願いを共有すること」が大切であると考え、「わが町とともにある学校づくり」「学校の応援団としての組織」を意識し、コミュニティ・スクールを推進している。そして地域と学校が願いを共有することの中核を担うのが「学校運営協議会」である。

1 学校運営協議会の役割

(1) 「熟議」をし、「協働活動」を考える

様々な課題やビジョンについてテーマを決め、「熟慮」し「議論」を重ねる。そこから問題解決の手立てを考え、学校と地域が願いを共有した「協働活動」を考える。



(2) 持続可能な活動内容を支え、高める

これまでの学校と地域が連携して取り組んだ活動を整理し、改善し、発展させていく。学校と地域が心を開き合い、心をつなぎ合いながらよりよい子どもの成長を目指すための基盤となっていく。

2 実践事例

(1) 学校運営協議会での「熟議」を通じた「協働活動」の実施

「熟議」→「協働活動」へ

第2回学校運営協議会のテーマを「子どもたちの安心・安全の確保のために」とし、「熟議」を行った。通学路の安全確保に必要なことや、いじめや虐待の早期発見のためにできることは何かなど活発な意見を交流した。その中で、学校環境保全が安全確保につながるという意見交換から、「協働活動」を決定。



決定を受け、各関係諸団体に協力を仰ぎ、学校周辺の草刈りや学校敷地内に放置されている小屋の撤去を実施し、子どもたちの安全確保につながる快適な環境づくりを進めた。

(2) 学校と地域の連携を大切にした「協働活動」の実施

①地域に貢献する活動として、肥田ヤングスターズや生徒会の活動を実践した。

〈実践例〉

- ・町民運動会や公民館行事を支援する肥田ヤングスターズ活動の位置付け
- ・生徒会による全校生徒の地域清掃活動の実施と地域への協力要請
- ・生徒会執行部による学校運営協議会委員との意見交流



②地域人材活用活動として、地域の方の学校教育への協力を依頼した。

〈実践例〉

- ・ふるさと学習の講師
- ・地域人材を積極的に登用するキャリア授業（職場体験学習、職業講話）
- ・郷土愛を育むための校内陶器ギャラリーの設置



3 これまでの成果とこれからの課題

[成果]: ○学校の教育課題として掲げている「主体性と社会性の育成」の向上
○機能する組織として学校運営協議会のよさが認識できたこと

[課題]: ○一小一中のよさを生かしたコミュニティ・スクールの推進

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業づくり

～これからの授業で取り入れていきたい川崎市立川崎小学校の実践より～

学力向上企画委員 駄知中学校 虎山 泰昌

今日的課題として生徒の「生きる力」を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められています。川崎小学校では、その「主体的・対話的で深い学び」の授業について研究、実践をされていました。その取組において三つの視点を大切にされています。

1. 全員が主体的に学ぶ
2. 話し合いで考えを深める
3. 人と人との関わりで学ぶ

川崎小学校では全員挙手の授業を目指しています。全員が進んで手を挙げて様々な考えを伝えることで、自分の考えを深めることができるからです。これは集団の中で学ぶことのよさを実感することにもつながります。全員挙手をするためには、自分から分からないことを質問したり、教えてもらったりする必要性もあり、主体的な学びにつながります。また、自信をもって全員挙手をするためには、話す力をつける必要があります。そこで川崎小学校では、話す力を付けるために、単位時間の中にフリートークの時間があり、テーマに合わせた話し合いを生徒たちだけで進めていました。低学年の時からこのような活動を行っており、自分の考えを話せる生徒がとて多く育っています。対話的な授業をつくっていくための手立てとして、フリートークを取り入れていくことは有効的な手立ての一つだと考えられます。さらに、教師のいない自習の時間であっても、テーマさえ決まっていれば、生徒だけで話し合いを進めることができる力を付けていました。

様々な学年や学級の授業を参観させていただきましたが、どの授業においても、自分の思い

や考えを話すための発問が用意されており、対話的な学びのある授業となっていました。そして驚いたのは、どの学年、どの学級、どの教員も、同じ授業過程で授業をされていたことです。授業研究や教材研究を学年や学校全体で取り組んでいると話されていました。そのため、学年や学級、担任の教師が変わったとしても、同じように授業を進め、子どもを育てることができるそうです。

授業の中で、全職員が以下のような子どもの姿を目指してみえました。

1. 生活経験や価値観などをもとにした本音の話し合いで、物事を多面的に捉えながら、最終的に自分なりの考えをもてる姿
2. 知っていること、どこかで習ったことを発表するだけの、知識優先の浅い学習にならないように心がける姿
3. 物事を一面的に捉えず、いろいろな角度から柔軟に考えることができる姿
4. 自分の考えが受け入れられないときでも、柔軟に思考し、粘り強く取り組むことができる姿
5. 知識や経験、学んだことを組み合わせ、新たなものを考え創造することができる姿
6. 主体的に物事を受け止め、自分を豊かにしていくことができる姿

こうした姿を目指すためには、授業の中で出す発問も大切になってきます。また、多様な考えを出し合える展開を工夫していき、そのための教材研究にも力を入れていく必要があると感じました。

では、どのように授業を展開されていたか、例を挙げます。社会科の授業では、「なぜ大仏を

作ったか。」と発問をすれば、その答えは教科書に載っているのので、調べて答えることができます。しかし、こうした調べて分かることではなく、「大仏造りは、当時の人たちを幸せにしたか。」という、調べるだけでは簡単に分からないことを授業の中で発問し、話し合いを行っていました。教科書に答えが載っているわけではありません。自分の想像したことを話していました。また、そこから未来に生かすことができないかということまで話を広げられるということにも驚きました。

さらにどの教科の授業でも、最初に自分の考えをもたせて話し合いを行い、話を聞いた上で今の自分の深まった考えや変化した考えを発表させるという展開でした。また、児童の発表の大切なところで、教師が切り返しの発問をするなど、児童が思考する場面が多くありました。さらに、全体交流の後には、汎用的な内容へと話を広げており、今自分の学んでいることが、今後に生かされるような学習になっていました。

川崎小学校では、思考力や判断力、表現力、コミュニケーション能力、創造力を養う授業づくりをされており、参考になりました。また、意見をまとめた後、生活で汎用できるように工夫されており、今後の学習活動にも取り入れていきたいと感じました。

今回の研修の中で、一番素敵だと感じたのは、子どもたちが、生き生きと自分の考えを語り合っている姿です。発表することに対して不安をもっている様子は感じられませんでした。子どもの意見に対して、教師が褒めてあげたり、「大丈夫だよ。」と声をかけてあげたりして、話しやすい雰囲気がつくられていました。そのような環境だからこそ、人と一緒に学んだり生活したりすることが楽しいと感じられるのだと思います。川崎小学校では、不登校の子どもがいません。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け

た授業改善をしていくことは、こうしたことにもつながると感じました。

川崎小学校の中臣信丈校長先生は「主体的・対話的で深い学び」の授業から、思考力を基盤にした汎用的な能力を養う教育を実践したいとおっしゃられ、その手立てとして五つのことを挙げられました。

1. 全員が主体的に学習に取り組み、学習内容を習得していくことができる授業
2. 学習問題解決に向けて、対話と人とのかかわり（相互作用）を通して、思考力・判断力・表現力等を養う授業
3. 教え合い、助け合い、認め合い「みんながよくなる」という価値観を大切にしたい授業
4. 実行委員会を中心に、学年のみんなが集団の一員として協力して主体的に取り組む学校・学年の行事
5. 認め合い、注意し合い、高め合い、規範があり、どの子どもも安心して過ごせる学級集団づくり

また、「児童の持っている力・可能性が十分発揮できる教育活動」と「一人も見捨てられることなく、みんながよりよくなるための教育活動」を目指していくと話されました。

これまでの自分が行ってきた授業を振り返った時、川崎小学校が取り組んでみえるほどの「主体的・対話的で深い学びのある授業を行えていなかったと感じました。私は数学科ですが、数学の授業で、もっと答えにたどり着くまでの考え方やこの学習が今後どの場面で活用することができるかなどを考え、話し合うことができるようにしたいと感じました。子どもたちが今以上に、思考力・判断力・表現力等を高められるような授業を目指していきたいと思います。

今回、川崎小学校で見て聞いて学んだことを参考にさせていただき、これからの教育活動に力を入れていきたいと考えています。

「私の教育実践」

児童の心に寄り添う

土岐津小学校 教諭 大竹 琴満

“So, today’s topic is seasons. Ready go!”

かけ声と同時に、教室に勢い良く“Hello!”の
声が響く。

今年度、外国語活動では特に「スモールトーク」
を大切に取り組んできた。4月、児童は何をどの
ように話しているか分からず、戸惑う姿が多く見
られた。私も、どうすれば話せるようになるのか
と悩んでいた時に、道を開いてくれたのは学年主
任の「会話が続いた回数を数える」というアイデ
アだった。

会話の行き来した回数を数えることで、児童は
前回との成長や達成度が分かり、少しずつ自信が
もてるようになった。また、話題はずっとその内
容で話し続けるのではなく、3分間で必ず触れる
という位置付けにしたことで、児童は「知ってい

る表現を話し続けてみよう」と少しずつ発話が増
えてきた。数え始めた当初は、平均回数が4回だ
ったが、2か月で25回に達するほどに成長した。

このアイデアには、主任がいつも話す「児童の
心に寄り添う」ことが根底にある。考えてみると、
6年生の児童にとって3分間も英語で話すことは、
とてもハードルの高いことだろう。その難しさに
共感し、少しでもそのハードルを下げ、話す楽し
さを味わせたいと、児童の気持ちを考え続けた
からこそこのアイデアだと思う。スモールトークで
の取組から、「児童の心に寄り添う」ことが何なの
かを学んだ。

今後のスモールトークの課題は、話題に対する
会話を深めることだ。「児童の心に寄り添う」こ
とを大切に、児童と共に成長していきたい。

「私の特色ある学級経営」

言葉の力～ポジティブな発言の連続が学級集団を向上させる～

西陵中学校 教諭 高野 直紀

「〇〇さんならできるよ」「学級には〇〇さんの
力が必要だよ」。些細な言葉に目を輝かせ、やる気
を出す生徒。

今年度、学級経営のテーマを「コミュニケーション
能力の質が高まる学級集団づくり」と設定し
ている。コミュニケーション能力の質を高めるこ
とで、他者と触れ合ったり、深め合ったりするこ
とができ、充実した人生につながると考えた。

中学生になる時期は、人間関係が複雑になっ
たり、人との触れ合いが希薄になったりしがちで
ある。生徒に聞いてみると、「社会で生きていく上
で、コミュニケーションは大切だ」と多くの生徒が
答える。だからこそ、教師が生徒のコミュニケー
ション能力を高めるような集団づくりをコーデ
ィネートしていく必要がある。「この人と話して良かっ

た」「またこの人と関わりたい」という思いを生徒
が持ち、さらに人との関わりが活発になる。その
ために、朝の会や帰りの会では日常生活で生まれ
る、相手を思いやる発言や励ましの発言などを継
続的に取り上げている。また、PEPTALKとい
う話法を紹介し、生徒とともに実践している。

PEPTALKとは、アメリカで試合前のロッ
カールームで監督やコーチが選手の心に火をつけ
る言葉がけとして誕生した「励ましの技術」とし
て確立されている話法である。いくつかのルール
があるが、「短く分かりやすい言葉がけ」と「相手
をやる気にさせる関わり」を大切にしている。

互いの関係を良好にし、ポジティブな発言の連
続が学級集団を向上させる礎の1つになると信じ、
今後も力が宿る言葉探しを続けていきたい。

形が整えば心が整い、心が整えば形が整う

濃南中学校 校長 竹中 正仁

2校目に勤務した中学校では、校舎内のいたる所に格言や名言が掲示されていました。その中にあった、『形が整えば心が整い、心が整えば形が整う』という言葉は、今でも私の心に深く刻まれています。

現任校においては、形を整えるために、『A：当たり前のことを B：馬鹿にすることなく C：ちゃんと D：できるようになる』というA B C Dを大切に、整った形を価値付けしながら、全職員で生徒の心が整うよう日々指導を行っています。

かつて荒れた中学校の学年主任を任された時、教室環境は乱れ放題でした。そこで、教室のロッカーを整えて、美しい環境を創り出すことを学年経営の柱の1つにしました。当初は担任が中心になって整えていましたが、徐々に学級組織を使っ

て整え始め、最後は自分だけではなく仲間のロッカーまでも整えるようになりました。空き教室を点検する際には、ロッカーの状況について黒板にコメントを書いて価値付けをしました。乱れていた教室環境が整い始め、生徒も徐々に落ち着き、安心・安全な学校生活が実感できる学年に成長していきました。教室環境の美しさを財産にし、誇りにまで高めることができた学級もありました。形を整えることの価値を実感できたことが、徐々に心の成長につながったのではないかと思います。

学校を訪問する際に、ついつい下足置き場や教室環境、特に教室のロッカーに目がいきます。この場所が整っている学校は、身なりが整い、授業姿勢が主体的であったり、挨拶がきちんとできたりする生徒が多いように思います。形は心の現れといっても過言ではないと思います。

新しいALTを紹介します



9月から土岐市内のこども園、幼稚園、小・中学校でALTとして英語の指導をしていただくアルマン・マデリン・フェイさんです。7月末で退任されたオリビアさんの後任として着任されました。

Hello, my name is Madeline! I am originally from El Paso, Texas (US). When I was three years old, I moved to California, where I have lived most of my life. I earned a Bachelor's degree in Liberal Arts with a concentration in Environmental Studies at Soka University of America. At SUA, I also studied Japanese for four years and studied abroad at Soka University in Hachioji, Tokyo. I love hiking, running, drawing, playing taiko, and doing ceramics! I look forward to meeting all of the students and teachers and teaching English here!

【お詫びと訂正】7月10日発行、教育ときNo.546号の8頁、中体連市大会結果報告の記載に誤りがありましたのでお詫びいたします。陸上男子総合優勝 土岐津中学校 準優勝 泉中学校に訂正いたします。